

ベトナムにおける日本文学の翻訳・出版・教育・研究

——現状及び今後の課題——

チャン ティ チュントアン
TRAN Thi Chung Toan

要 旨

本稿は、ベトナムにおける日本文学の翻訳・出版および教育・研究の現状を考察し、また、それらに関する課題を取り上げ、幾つかの提案を検討する。

(1) ベトナムでは20世紀初頭から60年代まで、日本文学の作品はほとんど翻訳されなかった。60年頃から、中国語・フランス語・ロシア語・英語から翻訳されたものが現れ、そして、南北が統一された1975年以後、特に2000年から日本語の原著から直接翻訳されたものが増加し、翻訳・出版によって日本文学作品・研究文献がベトナム読者に多く知られるようになった。

(2) 日本文学研究は1975年以前に南部で開始され、徐々に中部に広がり、1990年代以降、ハノイを始め全国に展開されてきている。

日本文学について発表された文献は、1969年から2008年にかけて101点となった。その内、70点が、『文学雑誌』『外国語の文学雑誌』『民間文学雑誌』といった文学雑誌類、『日本研究雑誌』などの専門雑誌に掲載された。その他、『一般知識普及』『現在の知識』等のムックや新聞に紹介されたものもある。それらはすべてが学術的な文献というわけではなく、単なる読後感としての文章もあり、作家・作品に対する解説・紹介・評論などもあった。投稿した作者は日本文学研究者もいれば、そうでない人もいる。日本文学紹介として大きな価値を持っているが、さらに専門的な研究を行うことが社会のニーズとなっている。

(3) 日本文学教育に関しては、中等教育から教えられているが、大学においてもわずかな時間数(約15時間から90時間)で概要的な知識を与えるに留まり、本格的な日本文学教育はまだ行われていない。

ハノイ大学で行われている日本文学教育を例に、ベトナムでの日本文学教育の現状を紹介し、そこで講師が不足し、テキストを始め参考文献等の資料が少ないといった課題を取り上げる。

そのような課題を把握した上で、日本文学の授業にはインターネットの情報を利用して、文字だけでなく音声・映像などを導入し、授業を楽しく行うことが大切であるということ、日本の専門家から協力を受け、特に大学院を設置し、大学院レベルで解決する方法が必要なことを検討した。これらの課題を乗り越えて、ベトナムでの専門的な日本文学教育・研究が着実に構築されることを願っている。

はじめに

近年、ベトナムでは村上春樹を始め幾つかの現代文学作家の作品がベトナム語に翻訳される

ことによって、日本文学が人々によく知られるようになった。さらに日本との外交関係が正式に樹立されてから35年を超え、日本との交流が多岐にわたるようになったことを背景に、日本語学習者が著しく増加し、日本文学への接し方、認知にも少しずつ明るい展望が開けてきた。

この機に今後のさらなる発展と成功を願って、本稿ではベトナムにおける日本文学の教育・研究の現状を分析し、今後の課題を取り上げ、幾つかの提案を検討してみたい。

ベトナムでは日本文学の教育・研究のために、日本の作家・作品および日本文学研究の資料が必要で、それらに日本語で接するか、またはベトナム語に翻訳するかが重要な問題となっている。以下、それらに関することを述べてみる。

1. ベトナムにおける日本文学作家・作品の翻訳・出版

ベトナムは中国を始め、旧ソ連・フランス・東ドイツ・東欧州諸国とは長年の関係があり、ある時期、幅広くかつ盛んに交流を行ったため、中国語・フランス語・ロシア語の資料や文学作品が早期から数多く翻訳されてきた。例えば、中国語の翻訳では、13世紀にベトナムの胡朝の胡季犛^{はーきり}という王様(1336 - 1407)によって五経のうち詩経および礼記がノム文字でベトナム語に翻訳された。そして、19世紀の初期、チュオン・ビン・キ氏(1837-1898)によって中国語の哲学原稿及び文学作品等が初めてベトナムの国語に翻訳された。

その伝統は近代に入っても継続し、第二次世界大戦が終結した後も、それらの言語から社会主義的思想およびその理論を始め、文学理論や各国の文学作品がベトナム語に翻訳されてきた。そのため、ベトナムでは1960年代から優秀な翻訳者が輩出され、彼らによって翻訳された傑作が多く世に残った。それに対して、日本語からの翻訳は歴史も浅く、実績もまだ少ない。

20世紀初頭、「日本に学ぶ」という精神で「東遊運動」が行われ、ベトナムの青年が300人ほど日本に渡した。民族運動家であるPhan Chu Trinhが「文明開化」「民族の開放」を求め、フランスへ渡る途中、日本に立ち寄り、「東遊運動」のリーダーであるPhan Boi Chauや中国の梁啟超^{りょうけいしやう}(1873-1929)との会合を行った。その後、Phan Chu Trinhは1913年頃、中国の梁啟超によって漢文に翻訳された日本の政治小説『佳人之奇遇』(柴四朗著)を基にベトナム語に書き直したことがある。これはベトナムで一番最初に紹介された日本文学作品だと言える。しかし、それは文芸・文化的な立場から選ばれた文学作品というよりも、当時の民主主義的思想を宣伝する目的で選択され、紹介されたものであろう。

その後、第二次大戦に巻き込まれ、60年代まで50年間ほど日本文学作品はベトナムにほとんど紹介されなかった。

1954年にベトナムは一時、戦争が収まり平和な時期が訪れたが、ジュネーヴ停戦協定によりまた南北分割され、それぞれが独立した制度を取って進んだ。外国から翻訳された文学も、その時期から1975年まではそれぞれ違った方向に分かれた。1975年以前にベトナムの南部では、日本の作品が北部よりも多く翻訳された。当時の南部での翻訳は、主に英語、そしてフランス語・日本語から翻訳されていたのである。それに対して、北部では殆どロシア語・フランス語及び現代中国語から翻訳されていた。

2006年に在ベトナム日本国大使館によって「日本書籍のベトナム語での翻訳出版状況」とい

う調査が行われ、その調査の報告書が出た。報告書を見たところ、殆どの作品がハノイにある中央出版社によって発行されたものであった。これは、1975年以前の南部で翻訳されたものが保存できなかったか、それとも、調査する際、時間・人手等が足りなかったため大規模な調査を行うことが出来なかったのではないと思われる。例えば、ハ・バン・ロン氏は「南にある幾つかの地方出版社、キエン・ザン総合出版社、情報・文化出版社等が日本文学を紹介するのに大きな役割を果たした」、また「1969年に松尾芭蕉の俳句はヴ・ホアン・チョンが、川端康成の『山の音』『千羽鶴』『伊豆の踊子』はヴ・タン・トウが翻訳した」¹⁾と述べているが、これらの出版社名、翻訳者および翻訳作品は氏の報告書には見当たらなかったのである。

さらに、ベトナムでは出版社以外に文学雑誌・文芸新聞紙等も翻訳作品や評論等を掲載し、日本文学を紹介するのに大きな役割を果たしているが、これらの書物も報告書では言及されなかった。

また、この報告書には未確認の情報も多数含まれ、参考資料に留めていただきたいと調査に携わった榛澤周一氏（当時日本大使館に勤務）が補足している。しかし、これはベトナムで最初に「日本書籍のベトナム語での翻訳出版状況」を本格的に調べたものであると言える。

調査の結果から、ベトナムでの日本文学翻訳の概略を知ることができる。

調査の結果によると、日本の書物は1958年、最初に小倉豊文の『絶後の記録 広島原子爆弾の手記』という作品がベトナム語に翻訳され、1958年から2006年にかけて91回にわたり、約80点の日本の文学作品がベトナム語に翻訳されている。

ベトナムでは1986年に市場経済システムが導入され、対外開放化を柱としたドイモイ（刷新）路線が敷かれた。それは文学翻訳・研究にも影響を与えた。日本文学作品が数多く翻訳された現象もこの報告書に見られる。

2006年までに翻訳された作家のうち、作品別から見ると川端康成がトップで10点（ただし、一つの作品は2種類の翻訳があり、別々の出版社から刊行されている）、その次は芥川龍之介と村上春樹が6点、三島由紀夫が5点、宮沢賢治が4点、谷崎潤一郎が3点の順となっている。また、翻訳使用言語がまだ確認できない作品が多く残っているが、おそらくそれらはロシア語・フランス語・英語から翻訳されたと推測できる。

そして、2002年以後に、初めて日本語の原稿から翻訳したものが現れるようになったということもわかる。

2002年から2007年にかけて村上春樹らの世界的なブームに乗り、ベトナムでも村上春樹・吉本ばななの作品が市場で流行するようになった。以前にあった英語から重訳に続いて、日本語から翻訳したものが加えられ、村上春樹の作品は10点、吉本は4点がベトナム人の手に入り、若者の人気を得た。それらは村上の『ノルウェイの森』『国境の南、太陽の西』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『カンガルー日和』『蛍』『地震のあとで』『世界の終わりとハード・ボイルド・ワンダーランド』『レキシントンの幽霊』であり、吉本の『キッチン』『TUGUMI』『N・P』『アムリタ（上・下）』などである。

最近、「www.erct.com」というホームページで、日本文学作品の翻訳・研究論文が多数紹介されている。これらを書いているのは、40年代から60年代にかけて日本へ留学し、現在、日本あるいは諸外国で生活を送っているベトナム系の人々である。彼らは趣味として日本文学の翻訳

を行っているが、殆どの作品は短編小説である。日本文学を紹介した作品としては、ベトナム国内で書かれたものと比べて数が多く、日本語から直訳されたものなので、情報がより正確である。ただし、ベトナムの大学生や一般のベトナム人たちには、あまり知られていないようである。

このようにベトナムが統一された1975年代以後、特に2000年から国内だけでなく国外からも日本語の原著から直接翻訳されたものが増加し、翻訳・出版によって日本文学作品・研究文献がベトナム読者に多く知られるようになった。

2. ベトナムにおける日本文学研究

ベトナムにおける日本文学研究は1975年以前に南部で開始され、その後、中部に広がり、1990年代以降、ハノイを始め全国に展開されてきている。

1969年、そして1972年に『南の文学雑誌』で Vinh Sinh, Mai Chuong Duc, Uyen Minh, Vu Thu Thanh 氏らによって日本文学が初めてベトナム人に紹介された。

1986年には、中部のフエ市にある『Song Huong 雑誌』に Nhat Chieu 氏によって俳句が紹介された。

川端康成・芥川龍之介・谷崎潤一郎や他の作家の作品が以前から数多く紹介されてきた結果として1990年代以降に日本研究が発展し、それに伴い日本文学研究が新たな局面に入り、毎年、発表された文献が増加した。それは2008年現在、約90点近くに上っている。以前に発表されたものと合わせて、1969年から2008年に発表された文献は合計100点以上となった。

この100点以上の文献は約70人によって、まず、『文学雑誌』『外国語の文学雑誌』『民間文学雑誌』といった文学雑誌類、『日本研究雑誌』などの専門雑誌に掲載された。その他、『一般知識普及』『現在の知識』等のムックや新聞紙に紹介されたものもある。それらはすべてが学術的な文献ではなく、単なる読後感としての文章、作家・作品に対する解説・紹介・評価論などである。投稿した作者は日本文学研究者もいれば、そうでない人もいる。一般の人々に日本文学に接してもらう目的として紹介された文献も多くあり、その意味でこれらの文献は日本文学を紹介する役割を果たしたという価値がある。私たちの統計では101文献のうち、約70点が文学類、他の雑誌類に掲載され、30点が図書または新聞類に発表された。

外国人の研究者によって書かれた図書の中には、日本文学について記述したものや日本研究の中で文学について一部紹介したものがある。ベトナム人によって記述された図書は、主に英語および他の外国語の資料を基に書かれたものであり、不正確な情報が常に見られる。

ベトナム人から発表された文献数のうち、トップを占めたのは Nhat Chieu で10点、その次の Ha Van Luong が6点、Nguyen Tuan Khanh が5点、Dao Thi Thu Hang が4点 Luu Duc Trung が3点、Khuong Viet Ha が3点といった順であるが、日本語の資料を参考に独自の立場から捉えた文献は少なく、Vinh Sinh と Nguyen Thi Hong Thu がいるのみである。

ジャンルと作家別から見ると俳句がもっとも研究され、俳句について13文献、松尾芭蕉について7文献がある。そして日本の作家の中では、川端康成が図書2点、研究文献28点と最も研究者に注目されている。

「ベトナムにおける日本文学翻訳・研究の現状」²⁾で Ha Van Luong 氏が「翻訳・研究活動によって、日本文学はベトナムでほぼ十分に紹介された」と述べているが、上述の如くベトナムにおける日本文学研究がまだ不十分・不正確な状態にあることが理解できる。

実はベトナムでは日本語学と日本語教育・研究は多くの日本語教師、特に若い教師の関心を集めているが、日本文学研究は皆から敬遠されているように見える。

2007年から2008年にベトナムで初めての日本語での日本語教育・日本研究の国際シンポジウムが、三つの大学において開催された。それらはハノイ国家大学付属人文社会科学大学、外国語大学とハノイ大学(旧ハノイ外国語大学)であった。シンポジウムの中で、日本文学について発表された文献は次の通りである。

表1 国際シンポジウムで発表された文学系の文献

主催者	外国語大学	人文社会科学大学	ハノイ大学
テーマ	『日本語学・日本語教育シンポジウム』	『ベトナムにおける日本研究促進にむけて』	『日本語教育を踏まえた日本研究への道』
投稿	60 (日本語系: 45, 越語系: 15)	37 (日本語系: 7, 越語系: 26, 英語系: 2)	42 (日本語系: 42)
日本文学に関する文献	1. Tran Thi Chung Toan 「宮本常一民俗誌を通して見た日本の女性—『忘れられた日本人』及び『女の民俗誌』を中心に—	1. Le Huy Bac: 「ベトナムの学校における日本文学教育」 2. Dao Thi Thu Hang: 「ベトナムにおける村上春樹の現象」	1. 中川成美 「日本文学・文化研究の理論的互換システムの構築にむけて」

この三つのシンポジウムのうち、外国語大学とハノイ大学が主催したものは日本語で行われたもので、日本研究にはベトナム人の研究者が少ないながらも何人か現れたが、日本文学研究に対しては非常に少なかった。専門家としてのベトナム人日本文学研究者は極めて不足し、本格的な日本文学研究はまだ成り立っていないと考えられる。

3. ベトナムにおける日本文学教育

ベトナムでは、1991年から高校で日本文学が教えられている。

最初、南北で教科書が違ったが、日本文学に対しては共通で、三年生に対して外国の文学紹介の授業が設けられ、その中で日本文学が参考内容として取り扱われた。テキストの中では川端康成に関する解説と『水月』の全体および『古都』の一部分が引用され、資料として掲載された。そして、2000年に全国の教科書が統一された時、『古都』が省かれ、『水月』しか教えられなくなった。そして、2008年に松尾芭蕉と俳句が川端康成に取り替えられ、高校1年から教えられるようになった。

最近、日本文学教育に関心を寄せ、日本語学部と学科をもつ大学において日本文学に関するカリキュラムを組むようになった。

また、日本語学科のない他の大学でも、文学部が以前から存在しているところは、外国文学研究の中の一つとして日本文学科目が設けられている。他の外国文学教育と同じく、授業や参

考文献はベトナム語で行なわれたり、紹介されたりしている。

以下ハノイ大学における日本文学教育を例に紹介する。

ハノイ大学では日本文学の科目は3年目の後期、つまり第6学期目に教えらる。一週間に一回で18回に渡り、6単位〔90時間〕で行われ、日本語が専攻に組まれている141単位のうち、4.25%を占めている。(以下の表を参照)

表2 ハノイ大学における年次別の各部門分配

4年目	言語理論 知識 10単位 (言語理論 部門)	日本事情 文化文学 11単位 (日本事情 文化文学 部門)	専攻日本語 34単位 (通訳・翻訳 部門)	特別講座 5単位	卒業論文 卒業試験 14単位
3年目					
2年目	基礎的な日本語 72単位 (日本語演習部門)				
1年目					
入学時					

(出典：Nghiem Viet Huong³⁾)

大体、前半は文学史、後半は原書講読に分かれ、前半は科目全体の時間数の3割で、後半は日本文学を代表する約7作家についての概略及び代表的な作品を選んで教える。原則として、文学史は固定された内容とスケジュールで教えるが、講読は作家・作品の選択がそれぞれの学年における講師の事情、現代日本文学における状況に応じて、省いたり、加えたりすることが許される。また、教えられる作家の順序も古典文学から現代文学へと展開するが、時には取り替えることができる。例えば、今年度は原書講読で松尾芭蕉・夏目漱石・芥川龍之介・太宰治・川端康成・宮沢賢治・吉本ばななの7作家から選ぶが、来年度からは村上春樹も加えるという具合である。

そのため、それぞれの新学期に入る前に科目を担当する講師は与えられた時間数に合わせ、シラバスを調整して学部へ報告し、それが認可された後、授業に入る。

以下は今年(2008年)のシラバスである。

2008 年－ 2009 年度における日本文学科目のシラバス

2006－2010 正規コース 第 VI 学期

週次	時間	内容	クラス数	時間数	教員
1	05/01/2009～11/01/2009	上代文学	4	5	Hoang Lien
2	12/01/2009～18/01/2009	中古文学	4	5	同上
3	02/02/2009～08/02/2009	中世文学	4	5	同上
4	09/02/2009～15/02/2009	近世文学	4	5	同上
5	16/02/2009～22/02/2009	近代文学	4	5	同上
6	23/02/2009～01/03/2009	現代文学	4	5	同上
7	05/01/2009～11/01/2009	宮沢賢治	4	5	Tran T・C・Toan
8	12/01/2009～18/01/2009	『注文の多い料理店』	4	5	同上
9	02/02/2009～08/02/2009	吉本ばなな	4	5	同上
10	09/02/2009～15/02/2009	『キッチン』	4	5	同上
11	16/02/2009～22/02/2009	夏目漱石	4	5	Truong Thi Mai
12	23/02/2009～01/03/2009	『吾輩は猫である』 芥川龍之介	4	5	同上
13	02/03/2009～08/03/2009	『蜘蛛の糸』, 太宰治	4	5	同上
14	09/03/2009～15/03/2009	『走れメロス』	4	5	同上
15	16/03/2009～22/03/2009	川端康成	4	5	Hoang Lien
16	23/03/2009～29/03/2009	『雪国』	4	5	同上
17	30/03/2009～05/4/2009	松尾芭蕉	4	5	同上
18	06/4/2009～12/4/2009	俳句	4	5	同上

上の表の通り、日本文学科目は文学史についての概要を紹介した後、代表作家および作品の原書講読に入る。一作家に一つの作品を選び、学生に読ませる。理解するレベルを確認するため、ベトナム語に翻訳させる作業もある。

これは日本文学専攻のカリキュラムではなく、わずか90時間で文学史や、代表的な作家・作品を通して基礎知識・概要的な知識を与えることを目的とするものだが、それ以外にも文学を通して日本語学習に必要な語彙・文法・日本語運用力を高める目標も含まれている。

ハノイ国家大学所属の外国語大学における日本語専攻のカリキュラムを見たところ、当大学では日本文学は第6学期目に4単位で教えられ、文学史が2単位、原書講読が2単位と、それぞれ半々の構成であった⁴⁾。また、ハノイ師範大学を始め、他の大学における日本文学教育では、Le Huy Bac氏によると「日本文学教育は大学によって授業数が異なっているが、一般に15時間(1単位)から30時間(2単位)の間の時間数で教えられ、その中で作家・作品紹介には松尾芭蕉と川端康成が取り上げられるのが通常である」⁵⁾。

そうすると本大学での日本文学教育はハノイ国家大学と比較すれば1.5倍、さらに一般的に教えられる他の大学とでは6倍も多くなるが、日本文学の知識はまだ十分とは言えない。

本大学を含め、ベトナムの大学における日本文学教育は幾つかの問題に直面している。

(1) 講師が不足している：上述の通り、ベトナムでは日本文学を専攻するカリキュラムを持つ大学がまだない。そのため、日本文学を専攻した卒業生はいない。また、留学生の中で日本文学を専攻した者も殆どいない。その結果、専門家としての講師が非常に不足している。日本

語を学ぶ中で興味を持ち、独学で日本文学を翻訳・研究して日本文学講師となるのが殆どである。そのため、日本文学講師として授業を担当するための専門的知識や研究方法はまだ十分に備わっていない。

(2) テキストを始め、参考資料等がない：限られた時間数で日本文学史を紹介するのに簡潔で体系的に網羅できるテキストは、今でもまだ見当たらない。テキストを選び、自作するのが簡単ではない上、日本文学の専門家としては知識も十分ではなく、そして相互の交流も出来ないため、これはなかなか解決しがたい問題である。特に参考資料・文献も殆どない環境である。

(3) 時間数：90時間で教えるハノイ大学はベトナムで日本文学教育に一番力を入れている機関であるが、日本文学の知識習得においては、まだ大きな壁があるので、改めて見直す必要がある。

(4) 教授法：以上の問題にも関わることであるが、日本文学の知識を備え、テキストを自作するか、あるいは適当な教材・資料を選び、そしてそれをうまく展開して、楽しく授業を行い、日本文学の学習・研究への興味を高めることが大きな課題としてある。

(5) 学生の学習意欲：ベトナムでは現在、小・中等教育における文学教育が大きな問題を抱えている。長年教師たちが文学の授業をモデルとして押し付け、その文章を学生に暗誦させるだけで、学生の独自の考え方や想像力の展開などを促さないのが現状である。そのため、学生は日本文学の授業が始まる前にすでに偏見をもち、加えて日本語の文章講読も困難であり、他の授業の宿題なども多いために、時間をかけて原書を読むことに怠慢となる傾向がある。

4. 今後の課題

以上、ベトナムにおける日本文学翻訳・研究・教育の現状について順に述べてきた。それを把握した上で、関連した問題を解決するため、以下に幾つかの提案を述べる。

(1) 日本語使用人材へ

日本文学の教育・研究を促進するために日本語の文章を読める人が重要な人材となる。ゆえに、日本語使用の講師および翻訳者を育てるため、適切な対策を講じる必要がある。

ベトナムでは日本語の原著からの翻訳が、指折り数えられるほど少ない。国際交流基金の調査では、2006年にはベトナムでの日本語学習者は29,982人、2007年には留学生が2,500人いるが⁶⁾、その中から日本語の原著から直接翻訳をする者は殆ど出てこない。ハノイ大学とハノイ国家大学に所属する外国語大学は、翻訳・通訳教育を中心とするカリキュラムを持つが、社会に送り出した翻訳者がまだ少ないのが現状である。殆どの卒業生は翻訳ではなく、通訳として就職している。また、日本語の教師も殆ど翻訳しない。それには様々な原因が絡んでいるが、特に翻訳より通訳の方が有利な点があるのではないかと考えられる。そのバランスが取れるように、日本の政府・国際交流基金を始め、他の日本の大学からも日本語の原著から直接翻訳できる専門家・講師等の派遣など適切な対策を取っていただきたい。

例えば、国際交流基金は毎年「翻訳・出版援助プログラム」を行っているが、必ずベトナムの出版社を窓口にしなければ援助しないという規則がある。それは理解できることであるが、

どこまで限定するかを是非再検討して欲しい。すべての手続きが出版社を通して行われることは、翻訳者にとってかなりの負担となる。官僚制度から設立された出版社の殆どは、手続きに多大な時間や手間をかけるからである。

(2) 日本文学教育への協力・指導

現在、文科系の留学生に対して、受け入れ大学は常に語学を中心に教授しているのが現状である。文学を専攻した学生の指導に努力を傾け、より良い環境を提供していないのである。教官も学生も言葉の壁に阻まれて、日本文学を諦める者が多い。その状態が続けばなかなか人材が育てられなくなる。

留学生に対する努力だけでなく、講師にも研修機会を与え、ベトナムで日本文学教育に携わっている講師に対しても良い環境を整えるように是非協力して欲しい。共同研究を行う形で情報提供や研究方法を伝授し、さらに日本の大学から日本文学の専門家を派遣して、現地で集中講義などを行っていただきたい。

(3) テキスト、資料寄贈

専門家と共にテキストに関する相談や指導、また参考文献などの資料も寄贈していただきたい。

(4) ベトナム側の大学は、楽しく授業を行うように努力する

日本文学学習人口が増えれば、将来、日本文学の翻訳・教育・研究の人材も確保できるので、出来るだけ日本文学を楽しく学習する工夫をして欲しい。例えば、インターネットの情報を利用して、文字だけの授業ではなく、映像のある授業、音読の授業もできればより楽しく学習できる。それを解決するために大学で勉強会などの開催を計画する。

(5) 大学院のレベルで問題を解決する

ベトナムでは学部はまだ2学期の制度を取っているが、大学院レベルで単位制度が導入されたので、院生には独学時間が増え、講師の指導の下に興味を持つ課題を見つけ研究するようになってきた。大学院で日本文学の授業を取り入れ、特に日本の専門家を招いて集中講義を行い、院生により高い興味と学習意欲を促し、専門的な知識・研究方法を身につけるようにできれば、それは最も良い方法だと考えられる。

ベトナムでは日本文学を含めて日本研究の大学院がまだ設置されていない。しかし、外国の文学、アジア研究などを専攻した院生に対して、日本文学に関する卒業論文のテーマを選ぶことを奨励する。

来年度からハノイ大学で日本研究大学院が開設される予定であるので、ベトナムで最初の日本文学授業を大学院レベルで行い、微力ながらも少しずつ、着実にベトナムでの日本文学教育・研究に貢献できるように努力している。

注

- 1) Ha Van Luong 「ベトナムにおける日本文学教育・研究の諸課題—文学的立場からみる」、『Song Huong』の言及による
- 2) Huynh Li, Hoang Ngoc Phach 『ファン・チャウ・チンの作品』文学出版社、1983年

- 3) Nghiem Viet Huong, Pham Thu Huong 「ハノイ大学における日本語教育の現状と動向—社会的ニーズおよび大学院での養成への直結」『外国語学雑誌』, ハノイ大学, 17号, 2008年
- 4) Ha Van Luong 「ベトナムにおける日本文学翻訳・研究現状」 <http://www.thongtinnhatban.net/fr/t2689.html>
- 5) Le Huy Bac 「ベトナム学校における日本文学教育」『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』ハノイ国家大学の国際シンポジウムの紀要, 2008年
- 6) 日本語事業部企画調整課 「世界の日本語教育とベトナムにおける日本語教育の動向から」, 『日本語学・日本語教育』国際シンポジウム論文集, ハノイ国家大学出版, 2007年

参考文献

- Nhat Chieu 『東アジアの文学』教育出版社, 2003年
- Nguyen Van Kim 「ベトナムにおける日本研究の特徴及び動向」『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』ハノイ国家大学付属人文社会学大学国際シンポジウム紀要, 2008年
- Doan Tu Huyen, Hoang Thuy Toan 『ベトナム文学翻訳者』文学協会出版社, 2002年
- Ha Van Luong 「ベトナムにおける日本文学翻訳・研究現状」, 『日本東南アジア研究雑誌』4号, 2003年
- Ngo Minh Thuy 「質の高い日本語教育のために—ハノイ国家大学の戦略と実践」『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』ハノイ国家大学の国際シンポジウムの紀要, 2007年
- Tran Thi Chung Toan 「ハノイ大学における日本研究専攻大学院開設諸問題」『外国語学雑誌』, ハノイ大学, 17号, 2008年